北斗句会（８月）選句

宮下ひかる　選

特選

NO. 11　未練ありしがみつきたる蝉の殻

八十路爺さん、蝉の殻から自然と湧き出た心境を偽りなく披瀝した。

選

NO.10　紅はちす葉並みの上の孤高かな

はちすが咲き競う様はすばらしい、他より少しでも紅で魅せびからしている。

NO､12　打ち水や縁台将棋はじめけり

打ち水のご褒美に、将棋を指し、隣付き合いし心を気分良しの様子は微笑ましい。

NO.6　縁日や娘の見立てし夏帽子

少々、娘の見立てた帽子が嬉しく、自慢げに親馬鹿ずばりかな。

NO.38　噴水の飛沫きらめき子ら走る

子供たちが噴水に戯れて、入れ替わり立ち代わりの様子が見て取り、涼し気なり。

田中資凡　選

特選

NO.12　打ち水や縁台将棋はじめけり

今は殆ど見かけない真夏の夕の過ごし方、田舎では、何処にでも見なれた風物詩、近所の子や大人を交えての将棋の一戦、子供の頃の郷愁を誘う句だ。

選

NO.　1 秩父路やカフェの天然氷水

秩父路のイメージと天然氷水とが巧くとけ合っている。真夏に秩父路を行く作者に天然氷水は天の恵みであったろう。

NO.18 ひとかぜに蓮の雨粒こぼれ落つ

蓮の雨粒が一陣の風にころりと落ちた、その一瞬を見事に捉えている。ひとかぜにの措辞がよく効いている。

NO.33 平穏な家並み一撃大出水

昨日までは何もない平穏な家並みが、ゲリラ豪雨に、みるみるの中に出水騒ぎ、一撃の措辞に、まさかと思われた自然の脅威が表出されている。

NO.37 饒舌の女将の運ぶ零余子飯

女将が運んできた零余子飯、女将の事細かい説明に、零余子飯を堪能しているのだ。

長池豆陽　選

特選

№23　ぐい呑みの底に吉の字冷し酒

酒器も味。吉の字の透けるぐい呑み、なにか嬉しいことがあったのか、美味そうだ。

選

№3　籐椅子や八十路の辿る着地点

廊下の籐椅子に座って海を眺めていた父の姿を思い出す。あれは寛ぎというより、疲れていたのかと今にして思う。

№12　打ち水や縁台将棋始めけり

コロナ禍によって消えた日本的風物の一つ。息苦しい日々、早い復活が待ちどおしい。

№17　きっかけは些末なことよ水中花

些細なことからの夫婦の諍い、傍らの水中花は我関せずと泰然自若　　水中花が効いている。

№25　暑き日や水でもてなす不意の客

おもてなしは心の響き。炎天下を訪ねてきた客にとって、さぞかし美味しい水であったことだろう。

大森康正　選

特選

NO.17　きつかけは些末なことよ水中花

人生の日常は、ちっぽけなきっかけから、多様な問題が発生し、苦悩が絶えない。散ることの出来ない「水中花」の取り合わせが絶妙。

選

NO.10　紅はちす葉並みの上の孤高かな

蓮花に対する先入観もあり、爽快感のある句。「孤高」が句の品位を高めた。

NO.23　ぐい呑みの底に吉の字冷し酒

一日の無為から救われるような一時。中七からは、作者の生活を楽しんでいる工夫が感じられる。

NO.24　芝刈って刈って炎天仰ぎけり

リフレインによりリズム感とリアリテイ感が出た。

NO.38　噴水の飛沫きらめき子ら走る

高齢な読者にとって、経験した光景が蘇り、懐かしさを覚える。

竹内雲泉　選

特選

NO.29　**涅槃像めく草に隠るる大胡瓜**

大胡瓜は地這で育てる。昔は草薮でも育てたが、今時は畑で栽培するだろうから、手入れ不十分で草が茂っているのかな？
破調ではあるが、大胡瓜を「涅槃像めく」との表現が気に入りました。

選

NO.11　**未練ありしがみつきたる蝉の殻**

蝉は、幹にしっかりと爪をたて「しがみついて」脱皮する。その亡骸を「未練あり」と言い切ったのが良い。句にリズム感もあり、素晴らしい句です。

NO.17　**きつかけは些末なことよ水中花**

なぜ、この句の季語を「水中花」としたのか不思議に思いましたが、机上の水中花を眺めていて、次第に花が水を吸って大きく開いていったので納得しました。選んだ季語が良い。

NO.23　**ぐい呑みの底に吉の字冷し酒**

「ぐい呑み」と「冷し酒」と合わせた言葉が良く、一呼吸で詠んだところが、スカッとしていて気持ちが良い。

NO.35　**打水や出会ひの少女片えくぼ**

「打水」と言う季語を選んだところが良いとおみます。出会った笑顔の少女が、いかにも清純で涼しげな感覚になります。

太田黒　幸風　選

特選

NO、１７　きっかけは些末なことよ水中花

夫婦げんかの元でしょう、些細なことが原因で夫婦げんかになったのでしょう、水中化は揺れもせづ関係ないと自然体にある、水中花が良くついている。

選

N0,　５　笊入りの秋茄子並ぶ朝の市

朝市の茄子が紫色に輝いている爽やかな光景が良くよめている。

ＮＯ　８　間を縫って低く水打つ菓子横丁

人通りが絶えた時間にさっと打ち水をしている小さな路地の光景が良くよめている。

ＮＯ、３０　みんみんと今日の舞台は寺の庭

みんみん蝉が今日はお寺の庭で精いっぱい鳴いて、寺の庭が舞台のようになっている、蝉の声と静かな寺の庭が対照的で良い。

ＮＯ、３８　噴水の飛沫きらめき子ら走る

噴水を浴びて子らが水遊びではしゃいでいる姿が良くよめている。

藤田紀潮　選

特選

NO.21 ぐい呑みの底に吉の字冷し酒

酒造店での試飲のひとこまだろうか。ぐい呑みに吉の字の発見し、「吉」も飲み干した。縁起と力強さの溢れた句。

選

NO.1　秩父路やカフェの天然氷水

天然氷と言えば、日光のものがつとに知られるが、秩父・長瀞にもあったのだ。今様のカフェ店と昔ながらのかき氷の対比の妙。

NO.3　藤椅子や八十路の辿る着地点

東京五輪、体操日本の若き世代の登場に呼応した絶妙のタイミングでの「着地点」。作者の人生の着地への自信も窺える。上５は「藤寝椅子」も。

NO.8　間を縫って低く水打つ菓子横丁

夏の水打ちでは間違っても人にかけてはならない。菓子横丁（川越？）では、客の間を縫って、遠慮しつつ低く小さく水を打つ気配り。

NO.18 ひとかぜに蓮の雨粒こぼれ落つ

蓮の葉にある雨粒のみに着眼した写生句。ひらがなの「ひとかぜ」が効き、気の弛みや油断大敵などの戒めを内包。

吉岡誠山　選

特撰

NO,２５　暑き日や水でもてなす不意の客

「とりあえずの対応は水」誰でもやりそうで、最も適切な対応だろう。
客の様子によっては、次を考えればよい。

選

NO,１３　夏空の五輪をゑがく編隊機

主催者側から見れば之で十番、ほっとする様子がよくとらえられている。
当時は曇り空。

NO,２２　散水のホースの先に虹ひとつ

ホースの先にできた小さな虹、その色彩で俳句としては十分。

NO,３０　みんみんと今日の舞台は寺の庭

「今日の舞台は寺の庭」などゆう筈もないが、そのように感じられる様子がよくとらえられている。

NO,３５　打ち水や出会いの少女片えくぼ

片えくぼを印象にとどめるような美少女ののだろう。もう一度と思たことだろう。

大崎石州　選

特選

NO.10　紅はちす葉並みの上の孤高かな

紅色の蓮の花の清々しくも凛とした様子。
色彩・映像が良く、視覚に訴えるものがある。

選

NO.14　脇路の無人売り場に茄子の艶

季語の活かし方が良い。

NO.21　螢火や飛翔で描く恋の文

発想は面白いのだが、飛躍のし過ぎ。

NO.29　涅槃像めく草に隠るる大胡瓜

畑を老後の楽しみとしている者にとっては収穫は何よりの楽しみ。
中七の「隠るる」は「隠れる」で良いのではないか・。

NO.31　送り火の都大路は闇の中

コロナ騒ぎで、送り火も中止となった都大路。状況・場所が明確。

森田光彦　選

特選

NO.２６　喫水の浅き船行く晩夏光

積荷を無事陸揚げし、新しい任務に向け軽快に航走している船の様子が
目に見えるようです。季語の「晩夏光」が利いています。

選

NO.１３　夏空の五輪をゑがく編隊機

「ゑがく」の表記から編隊機の動きが想像できます。見事です。

NO.１７　きつかけは些末なことよ水中花

季語の「水中花」で、反省している状況よく分かります。

NO.２４　芝刈つて刈つて炎天仰ぎけり

促音便「刈つて」「刈つて」のリフレインが、達成感とやれやれ感を上手く
読者伝えています。

NO.３２　万緑や時代を刻むチバニアン

現地の情景とも思えますが、季語「万緑」は、生命力の象徴でもあり、数十万
年にわたり継承されてきた歴史を感じます。

山縣秀雄選

特選

No.24　芝刈って刈って炎天仰ぎけり

炎天下で芝刈りをしている作者の気持ちがよく分かり、「刈って刈って」のリフレインも良い。

選

No.10　紅はちす葉並みの上の孤高かな

紅はちすの気高さを下五が言い得てる。

No.14　脇路の無人売り場に茄子の艶

無人スタンドに新鮮な採れたての野菜を並べている景があり、茄子そのものの艶が眩しくて良い。

No.17　きっかけは些末なことよ水中花

小さなことと水中花の取り合わせが抜群に良い。

No.30　みんみんと今日の舞台は寺の庭

身近な情景をよく観察しており、中七の表現が良い。